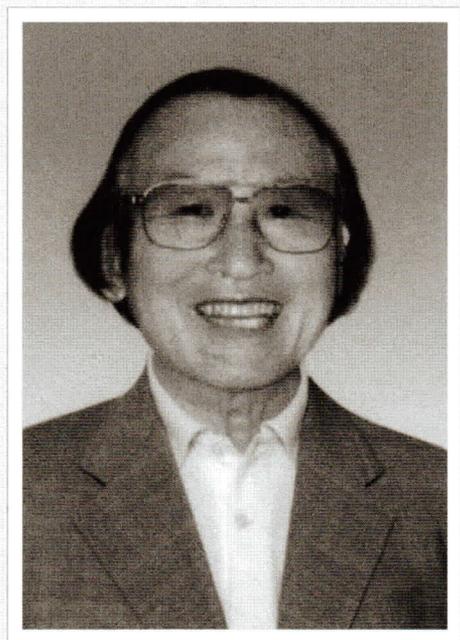


追悼文集

内山光雄さんを偲ぶ

追悼文集

内山光雄さんを偲ぶ





まえがき

内山光雄さんが亡くなられて、早くも二年の歳月が流れました。

亡くなられた直後に「内山さんを偲ぶ会」を準備していたのですが、その後、震災が起きたこともあり、ようやく二〇一一年秋に開催することができました。「偲ぶ会」には多くの方々が出席され、欠席された方からも心のこもったメッセージが寄せられました。

この小冊子は「偲ぶ会」を準備したメンバーによって編集されたものです。

本来なら、もつともつと多くの方々に寄稿をお願いすべきところですが、限られた条件のもとで、ごく一部の方に絞らざるを得なかったことをお許しく下さい。

日本の政治も社会も、そして労働運動も、大きな転換点に直面している今こそ、あの「内山節」を聞きたいと思うのは、内山さんに薫陶を受けた誰もが感ずることではないでしょうか。この小冊子を通してそんな思いを共有し、改めて内山さんの人柄と教えを偲ぶ機会にして頂ければ、と念ずるばかりです。

二〇一二年一月一九日（三回忌の命日）

「内山光雄さんを偲ぶ」編集委員会

目次

内山さんのことども	兵藤 剣	8
生涯の教師としての内山光雄さん	高木 郁朗	10
大地を踏みしめた天与のオルグナイザー	山本 博	12
『職場の労働運動』のこと	小松 善雄	14
地域闘争に遺した偉大な足跡	粟森 喬	17
職場活動こそ人間がいる	淵上 貞雄	20
内山光雄さんのご逝去を悼んで	越田 智宏	23





追悼の辞

渡邊 國衛

26

道南バス会社更正法下の闘いと組合員読本づくり

大谷 浩

29

職場総点検運動

井田 隆重

32

面白うて やがて身に沁む 内山節

高橋 征夫

35

内山光雄さん追悼

高橋 均

37

自主管理社会の原典を学ぶ

佐々木啓之

39

観光労連育ての親、そして上司として

北岡 孝義

41

「職場」と「人間」に徹した指導者

龍井 葉二

43

感謝の言葉 在りし日を偲んで

内山 一枝

46

内山さんのことども

東京大学名誉教授 兵藤 剣

内山さんに面識を得たのは、多分、私が職場闘争を軸にすえて総評運動の軌跡を追いかけてはじめた一九七〇年代後半のことであつたと思う。内山さんの関わっていた勉強会で話をさせられたこともあつたし、一九八三年「幹部闘争から大衆闘争え」という内山さんの著作が復刻されたときには、解説役の一人として起用された。私は内山さんの個人史を追いかけていたわけではないが、内山さんが北鉄労組のリーダーとして関わった昭和二〇年代後半の職場闘争には教えられるところが多かつた。内山さんは、「職場闘争・職場オルグ・統・幹部闘争から大衆闘争へ」（一九五九年）という書物のなかで、職場闘争は職場のなかに「対等な契約関係」をうち立て労働力の処分を資本に一任しない体制をつくることを目的とするものであり、組織づくりの出発点をなすものと位置づけている。

一九五八年七月、職場闘争を労働組合活動の基調にすえ、この運動のうちに「階級解放への主体的な下部構造」をつくっていかうという思いを込めた「総評組織綱領草案」が発表されたとき、内山さんはこう発言している。自分たちのやってきた職場闘争が大きく評価されているのだから、悪い気はしないし、結構なことですといたいところであるが、職場ごとの部分要求で実力闘争が組めるというようでは組合の秩序が失われるという意見や疑問が後を絶たない。草案は、これに対し「如何ほどの説得力をもっているのだろうか……私の一番



不安に思うところである」。そして、「組合員は組合活動をしに会社へきているのではなく、仕事をしにきている」のだから、「労働者を階級意識の権化」としてでなく、正しく「人間」として見つめ、「人間」として扱うこと」が求められているのではないかと付け加えている（『労働法律旬報』一九五八年七月上旬号）。

お寺さんの長男として生まれ、駒澤大学入学にあたって一旦は得度したものの、海軍予備学生に志願して海軍少尉に任官し、特攻隊基地である千葉香取航空隊に配属され、雷撃機で出撃する間、同期の予備学生三八人の半数以上が還らぬ人となったという。敗戦で除隊しても僧籍を継ぐ気になれなかった内山さんは、姉の勤めていた北鉄でとりあえず働きはじめたが、四六年二月北鉄労組結成にあたり組合の書記をやらないうという誘いに乗り、「あとはおつりの人生」という想いで戦後を生きはじめたとのこと。自伝的書物の冒頭で、内山さんは、「人生の基点は敗戦後であり、その時の心象風景にあった」と語っているが、それは「人間は殺してはいけないし、殺されてはならない。……『はじめに人間ありき』という想い」であった（池田実・前川清治『はじめに人間ありき』二〇〇二年）。職場闘争を労働組合の協約闘争の一環として位置づけた北鉄労組の運動論は、こうした内山さんの人生にたいする想いの表れであった。

連合の発足は奇しくもベルリンの壁の崩壊と時を同じくして始まったが、この新しい時代を生きる人にとっても内山さんの足跡は継ぐべき遺産を残しているのではなからうか。

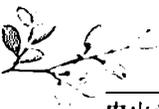
生涯の教師としての内山光雄さん

日本女子大名誉教授 高木 郁朗

内山さんという人について、世間では、労働運動左派の闘将というイメージが少なくとも一部にはあるように思います。たしかに、北陸鉄道労組では内灘闘争を組織し、私鉄総連では、ワンマン経営者と対決した福島交通争議など多くの中小私鉄争議を指導した内山さんの経歴はそうした評価を無理からぬものにしていきます。しかし、多くの機会に内山さんからさまざまなご教示を直接にうけたものとしては、少し違った印象をもっています。

その思いを深くしたのはいまからもう三〇年以上まえの一九七〇年代後半に、早川征一郎さんたちと、「賃金と社会保障」がスポンサーとなって、単産研究会を立ち上げ、その一つとして、私鉄総連代表として、当時副委員長だった内山さんに来ていただいたときのことです。そのときの二つの質問に対する内山さんの答えはいまでもよく覚えていきます。

一つは、産別組織としての私鉄総連の根拠は何か、というものでした。答えは、文字通りであったかどうかは自信がありませんが、「ハンドルを握る労働者の同じ匂い」というものでした。少し論理的に考えると、ハンドルを握っていても、私鉄総連以外の組織に参加している労働者があることを考えるだけでも、正確な答えにはなっていないことがわかります。でも、内山さんは、さらっと、しかしまことにまじめにこの情緒的な答えを示してくれていました。恥ずかしながら、妙に感動してしまって、続けて質問をするのを忘れるほど



でした。労働組合のリーダーとしての内山さんが、理論を理論として語るというのではなく、現場の組合員の感覚をつうじて、問題の焦点を表現する名人であったのだな、とあらためて思います。

もう一つは、私鉄総連の、というより本質的には北陸鉄道労組の職場闘争とはなにであるのか、という質問に対するものです。これは具体論で答えいただけました。道路が混んで、バスが遅れたために、所定よりハンドルの時間が長くなれば、その分の残業時間を請求するのはあたりまえではないか、というものでした。理屈っぽくいえば、労働者は一定の賃金のもとで包括無定量の仕事をしているのではなく、時間や労働内容と賃金とのあいだでしっかりと契約のもとに働くべきものであって、しっかりと集団的契約をかちとること、さらにかちとった契約を順守することこそ、職場闘争の根幹である、といわれたのだと思います。ここには、清水慎三さんが中心に作成された総評組織綱領草案の権力基礎としての職場闘争というよりは、いまふうにいえばワークルールづくりのための職場闘争という世界がひろがっていたように思われます。

この研究会の印象だけではありません。ほかの多くの研究会・シンポジウムや出版のさいにいただいた沢山ののご助言や、冗談まじりに言及される職場の労働者の生息などを思い起こすと、あるいはまた総評副事務局長として労働戦線統一あり方を論議したこともありましたが、内山さんは、まさに働く者が主導する日本の近代化のための現場主義の立場に立つこともすぐれたリーダーだったのだ、と思います。そうしたことを教えていただいた内山さんは、私だけでなく、多くの人びとにとって生涯の教師だったと思います。合掌。

大地を踏みしめた天与のオルグナイザー

日本労働弁護団・名誉会長 山本博

JR新橋駅から五分くらい、当時西久保巴町とよばれていたところに、「労働旬報社」があった。と言っても、もと労働協の事務所があった木造二階建のオンボロ事務所だった。その建物の中に労働旬報法律事務所が同居していた。同居と言うよりは間借りのようなもので狭い部屋に、東城・鈴木・鎌形弁護士という猛者が巣くっていた。そこに僕が入ったのは昭和三十二年。もともと出版に関心があったので、旬報編集部の木松・藤原君と毎日顔をつき合わすことになったし、旬報の編修を手伝うようになった。

弁護士になる前は、早稲田の野村平爾研究室にいた関係で、一九五〇年代の労働運動は半ば身を突きこんだような身近なものだった。そうした中で北陸鉄道闘争のことはいやがおうでも耳に入ってきたし、ことに日本での初めての基地反対闘争と言える内灘闘争については強い関心を引かれた。そして、今までの労働組合の諸闘争とは性質の違った、いわば社会的大衆的規模の新しい運動をオルグナイズした内山という新しいリーダーがいるということも聞かされた。

その内山さんとは、一著書の出版のため当時法律旬報社を訪れるようになったから一対面するようになった。一目見てちよつと話をしただけで惚れこんだ。これは僕だけではないので、誰でも引きつけられるようなオーラを持っていた。以後、長い交際になるのだが、あのとつ



とつと語る雄弁、内山節を聞くのが楽しみだった。

総評の弁護団の幹事長、後に会長になった関係で、総評の多くの幹部達と知り合いになれたし、事件の取扱いをめぐっても労働運動の建前と本音ということも知るようになった。そして、高野、太田、岩井さんといった大幹部達とも親しくさせてもらったが、とりわけ仲がよくなった、心を引かれたのが全金の佐竹と全連の宝樹さんだった。総評のいわゆる民間幹部の中でも左と右との対極になるようなリーダーだったが、面白かったのは二人とも根っからのトレードユニオニズムの信奉者だったことで、イデオロギー偏重と、政党の組合支配は嫌っていた。この二人と非常に似たところがあると同時に全く異質で、ユニークな存在だったのが内山さんだった。違う点は、内山さんは単に私鉄総連の幹部というだけではなくて、文字通り現場で組合員と一緒に生きていたことだった。内山さんの初期の著書に繰り返し出てくる組合の活性化、大衆闘争論、職場討論、組織づくり、活動家のあり方など、古くして新しい話だった。しかもそれを本でなく、目の前の生の声で聞くと、文字通り血湧き肉踊る思いがしたものだだった。

今、ふり返ってみると、内山さんはやはり時代が生んだ人で――今では決して出てこないだろう――、芯の芯まで、労働運動のオルグナイザーで、それも単なるオルグナイザーでなくオピニオン・リーダーでもあった。今の労働運動をみるたびに、内山さんのような人が出てこないかと思うのは老人の愚痴なのであろうか？

『職場の労働運動』のこと

東京農業大学教授 小松 善雄

「おまえたち、働いているか。動いているだけでないのか」

——挨拶代わりにこういって、飄々と社屋に入ってくる男がいた。

がっちりした体形で精悍さを漲らせ、火の玉のような人である。労働旬報社がまだ、港区西久保巴町にいた時代である。まわりの人に聞くと、その人が内山光雄さんであった（社内では「内山さん」、「内山さん」と呼んでいたもので、ここでもそう呼ばせていただく）。

労働旬報社が「内整理」に入り事実上の倒産で齷齪していたある日、木槍哲夫社長と柳沢明朗編集長の御二人から編集室に呼ばれた。単刀直入、「小松、内山さん付けの編集者をやらないか」というのである。「先輩編集者を措いてなぜ、私が」というと、「内山さんは個性の強い人だから、怒鳴られることもある。お前は打たれ強そうだから、やれ」というのである。

そのとき、大学時代、中央大学で学生運動をやっていた私は自治会が派遣するクラス・オルグの一助のために、——理解できたとはとてもいえないなかつたとしても——総評が「ニワトリからアヒルへ」の転機をつくった、内山さんの「幹部闘争から大衆闘争へ 北陸鉄道労組の経験を中心として」（労働法律旬報社、一九五四年）、つづく「職場闘争・職場オルグ 統・幹部闘争から大衆闘争へ」（労働法律旬報社、一九五九年）を読んでいたので不思議な縁だな



あと思ったものである。

実は内山さんは、この時期、労働旬報社の再建のため原稿料抜きで自著を発行することを提議してくれていたのである。そして内山さんの胸中にはその自著のタイトルも決まっていた――「職場の労働運動」。

こうして私は内山さん付けの編集者になったのであるが、私の仕事は、当時、私鉄労連の副委員長を務め各地の私鉄労組の回交支援・争議指導の激務の合い間を縫って書かれた原稿の一束、一束を心して読み感想を述べることであった。内山さんは「お前が理解できるように書かれているかを原則に見ろ」といわれたので自由にわからないところを述べ、内山さんから二度とはない「講義」を受けることができた。

怒鳴られることもなく、一作が仕上がるたびに川崎市向ヶ丘のご自宅に招かれ、内山さんに永年連れ添って人生の甘いも酸いも弁えられ、豪放磊落であっても心配りの人であったあの内山さんも唯々諾々に終始させていた奥様、一枝様から東京では味わえない、手造りの石川県の地場料理を振る舞っていたいたひと時も忘れえぬ思い出である。

結局、「職場の労働運動」は「上」が「要求づくり」と団体交渉、「下」が「合理化とたたかう組織づくり」の二冊なつてまとめられた。

「職場の労働運動」は「日本の労働運動が弱くなったのは職場の労働運動が弱くなったからだ。まっとうな産業別労働組合は職場の労働運動に根差してこそつくれる」という内山さんの従来の信念を心血注いで吐露したものである。同時に労働旬報社再建のスタートを画した本でもあったといえる。内山さんのおかげで編集者冥利に尽きる仕事をさせてもらえたことは、私の人生にもとても大きな幸せである。

その後も内山さんとは「賃金と社会保障」の存続にかかわって何度かお会いしたが、そうした折、もともとお寺の出である内山さんが、当時出たばかりの、新興仏教青年同盟の妹尾義郎氏の鮮明な生涯を描いた「仏陀を背負いて街頭へ」(岩波新書一九七四年)に触れられ、あれはいい本だ”とぼろっと言われたのがいままも記憶に生々しい。



地域闘争に遺した偉大な足跡

元・石川県評議議長 粟森 喬

内山さんの三回忌。没後二年。もうそんなになつたかと思ひながら…。

内山さんに最後に会つたのは、五年前位だろうか。出身の北陸鉄道労組の会館で、ステッキを持っていた。「どうしたの？」と聞くと、「アルツハイマーで歩きにくい、だんだん悪くなっている」と微笑しながら答えてくれた。「毎日、海軍体操やつてもなるの？ スキーやつても釣りやつていてもなるんだ。いやな病気だね」と三〇分位、今私が内山さんの父親の寺（一閑院）の総代を引き受けていることの話から、とりとめのないおしゃべりをした。

別れ際に、「ともに元気で…」と言うと、「粟ちゃんもな！ 息子さん（次男で障がい者）のこともあるから、お前さんこそ長生きしろな」といわれた。対面しての最後の会話だった。ネクタイはきらいと言い、ノーネクタイでも、おしゃれ、ダンディな内山光雄さんだった。病状が悪化しているとの報を聞き、お見舞いにと思ひ夫人に問い合わせたところ、本人から電話があつた。

「遠い所から来なくてもいいよ。それにみつともない姿をみせたくないよ。後はよろしく頼む。葬儀にも来んでもいい、そちらで手を合わせておくれよ！」と、往年の声からすれば、力なかつたと思ひながら…。

内山さんが、総評および石川県下の労働運動、革新運動に与えた影響は偉大としか言いようがない。

私と内山さんが、本格的に付き合いたしたのは、内山光雄さんが総評副事務局長に就任した一九七六年。私も全電通石川県支部委員長から、石川県評事務局長に就任した時期からだ。私が全電通（現NTT労）で反戦青年委員会運動等で、暴れていた時代でもあった。限界を感じ、周囲の勧めもあり、地域労働運動に転身した時期からだ。

当時、石川県労働運動史が発行された。目を通すと内山さんが出身労組の北鉄のみならず、石川県評の地域闘争で、大きな足跡を残したことが記述されている。

戦後、米軍内灘基地反対闘争を、地域住民と労働組合が地域ぐるみ闘争へと発展させた役割の担い手が、内山光雄さんだった。

当時、内山光雄さんは労働党公認で、衆院選に出馬したことがあった。本人を、私が初めて知ったのはこの時のこと。内山光雄さんの応援演説に、高野総評事務局長がかけつけていた金沢駅前だった。

私は中学生だった。聞くともなしに聞いて、感動した。話し方が情熱的で、国を憂う気持ちが伝わり、脳裡に今も焼きついている。

内灘闘争は、その後砂川闘争をはじめ、全国の基地反対闘争に波及した。安保反対闘争の土台となった。

米軍の基地資材搬入を、私鉄である北陸鉄道が行っていた。ほかの搬送手段がなかった時代である。北鉄労組は、輸送拒否のストライキをやった。占領時代である。

内山さんは、GHQ官憲に拘束される覚悟だった。ストが短期だったことや、県民世論の

支持もあり、拘束はなかった。

内山さんと酒を飲みながら、冗談とも本音ともつかない会話をした。

「あの米軍基地反対は、内山さんが特攻隊に語った鬼畜米英の延長もあつたんじやないの？」栗ちゃん、それを言っちゃお終いだよ」と高倉健のセリフで返してきた。

内山さんは、特攻隊教官、士官として多くの兵士を送り出したことは、いつでも自らの「ざんげ」として語る。日本を二度と戦争をしない国とするために、労働組合運動に参画したことは、県評退任後に県評労働学校長として就任して頂き、各地の講座で語って頂いた。

労働者と住民の「地域ぐるみ」闘争を展開した高野・内山時代は、産別労働運動重視の太田・岩井時代で幕を閉じ、そして、今の連合時代。戦後革新は終わったのか。

昨今の反原発・市民運動のうねり、高まりに、労働組合の存在が希薄だ。領土問題をきっかけにして、偏狭なナショナリズムが台頭している。安倍晋三が自民党のトップ、そして総理になろうとしている。今のカオス（混沌）を嘆くだけでは情けない。

内山さんは死んだ。私も現役ではない。それでも、内山さんが歴史やその後に続いて、私やその仲間が目覚め、行動し、結集することを信じている。

内山さん安らかに眠れ。あの世で私が出会った時、土産話ができるよう、もう少し、チョッピリがんばろうと思う。合掌。

職場活動こそ人間がいる

前参議院議員 淵上 貞雄

内山光雄さんは遠くて近く、近くて遠い、接してみると実に細やかで柔らかな心遣いの人でした。

私鉄総連は結成（一九四六年二月四日）以来、日本の労働運動・平和運動の中で産別として主要な役割を果たしてきました。

私鉄産別闘争の主要闘争は、春闘、秋闘、交通政策でした。要求と解決は、統一要求・統一交渉・統一行動で、本部が交渉・スト指令・妥結の三権をもつ産別の中で、最も進んでいた産別組織でした。

これができるのは総連・地連・単組の団結と信頼があったからだと思います。闘争指導に当たっていた内山さんの役割は大変大きなものがありました。

労働運動も歴史の流れの中で紆余曲折あり、経済的、社会的構造変化、阪神淡路大震災、東日本大震災による社会の変化、政権交代等あって、私鉄も例外ではなく、社会の大きな変化と進展とうねりの中で変わってきています。

労働運動昂揚期、「昔軍隊・今総評」と呼ばれた時代、一方で戦後の混乱期から資本も立ち直り、労働運動に対し、首切・合理化・組織分裂の攻撃を強め「アメとムチ」の労務政策で反撃してきました。

労働組合も抵抗・反撃し労働争議が多発、私鉄も同様に経営からの攻撃も激しく、全国各地で多くの争議が組織されました。

労働学校で学び、闘争実戦で学び、労働運動の道を歩んだ人は多く、争議で寝食を共にして直接薫陶を受けた人は現職・OBを問わず、今でも元気に活動されています。これらの人々は私鉄総連の重要な人的財産だと思えます。

私鉄労働学校で各部活動の中で、内山さんは労働運動のロマンを語り、希望と勇気を与えてくれました。また、職場実態の現実的な報告、闘争現場からの実践に基づく講義内容は職場活動で悩める者に対して、明日から実践できる、すぐに役立つ講座でした。

青年運動、職場活動で大きな転機になった事象は、一九六四年四月一七日、公労協を中心とした半日ストライキが、太田総評議長と池田首相とのトップ会談で中止に至る、いわゆる四・一七ストと私鉄総連主催による労働学校でした。

四・一七は、労働運動とは何か——を考えさせられる契機になりました。私鉄労働学校は日本の労働運動、私鉄総連、産別運動や産別組織について学び、特に内山さんを自分の中に強く意識をするようになりました。

内山さんから教えられたことは、今でも強烈な印象が残っています。職場活動、職場闘争「現場の実践に裏打ちされた『労働協約なくして、労働なし』。職場活動もなければ職場闘争もない」と言われたことでした。

「職場は労使が激突する現場である。職場活動は組合員の教育と、一人の人間として育てていくところだ。職場活動は権利闘争だ、職場活動なくして労働運動はない。活動は現場だ。現場に人間が居るではないか」と、内山さんの運動は、先ず人間ありきでした。

私鉄九州地連時代、戦前の軍隊経験を持つ、内山光雄（総連副委員長・中尉）、佐々木栄（地連委員長・軍曹）の二人から指導を受けました。

二人の共通点は、争議指導に当たって指令・指示・報告には特に厳しかったことでした。日常の生活でも約束事にはうるさかった。今でも心が引かれて離れない。

内山さんの波乱に富んだ人生から多くの事を学んで、私たちも反省し決意をあらたにしました。

職場闘争、幹部闘争から大衆闘争、ストライキなどの言葉さえ見聞しなくなってきた昨今、内山さんは労働者になんと呼びかけるでしょうか。



内山光雄さんのご逝去を悼んで

北鉄退職者の会会長 越田 智弘

内山光雄さん、ご逝去の知らせを受け、在りし日の様々な思い出が脳裏をよぎりました。

私が入社した昭和三十年当時、内山さんは北陸鉄道労働組合の執行委員長でした。

社会の事について右も左もわからない十代後半、少年から成年への過渡期の頃だったと思います。

オルグ常会で内山委員長のお話を伺った事を、半世紀を過ぎた今もなぜか鮮明に記憶に残っています。

尚、内山大先輩に対して、内山さんとお呼びする事をお許し願います。

ここで改めて、内山さんが果たされた数々事績はきわめて広範囲にわたり、とてもこの紙面で言い尽くすことが出来ません。

幾つか検証してみたいと思います。

労働組合運動で働くものの生活を守り、地位の向上を目指し、さらに平和を守る闘いの先頭に立ち、まさに命を掛けた闘いの連続であったと思います。

内灘のアメリカ軍の基地反対の闘いでは、日本の内灘・世界の内灘といわれ、わが国のアメリカ軍基地反対の先駆的役割を果たしました。

昭和二十七年（一九五二）年九月、石川県内灘村の砂丘地を、在日アメリカ軍の演習場とし

て接收するという方針ができました。北鉄労組は内灘村民の接收反対の闘いにいち早く関心を示し、農漁民と連帯し、共に闘う姿勢を示したのです。

輸送に携わる労働者として、軍需物資輸送拒否で一次・二次のストライキを実行していません。

この時期、昭和二十七（一九五二）年は松本清張さんの「日本の黒い霧」でも記述していますが、下山事件・三鷹事件・松川事件・青梅事件・辰野事件・メーデー事件・菅生事件・芦別事件等、一連の謀略事件が頻発していた時代でした。

昭和二十八（一九五三）年六月十四日、わが国で最初のアメリカ軍事基地に反対する第一次ストライキ四十八時間の決行を指令する闘争指令第一号が、十一時に出されました。

当日、北鉄金沢駅で停止していた軍用物資を満載した貨物を爆破する陰謀があり、との情報の中で、組合員を総動員して徹夜で警戒に当たった——と北鉄労組三十年史は記載しています。

権力による謀略を未然に防いだことが、その後の組織の発展強化を促す天王山であったと思われれます。

「内灘闘争は平和の闘いであるとともに、究極的には民族独立の闘いであった」と、年史は総括しています。

後世の歴史は必ず、この戦いの意義を顕彰し、その功績を永らく留める事と信じます。

また労働の安全を守り、働く環境を保証する労働協約では、人権擁護の観点から、レットパージ反対の闘いと連携させ、ストライキを背景に闘いを進めました。

この中で、全国各地から目標となる労働条件を多く獲得してきました。



半世紀以上にわたり、日本の労働運動を指導しリードしてきた理論家であり、そして優れた左翼言論人であった内山光雄さん。

まさに戦後日本の社会の進歩と発展に寄与されました。

「生あるもの滅びるは世のならい」とはいえ、今、大きな喪失感と言いやうのない寂寥感につつまれています。

内山先輩、長い間まことにご苦勞さまでした。

ありがとうございます。どうぞごゆっくりおやすみ下さい。

最後に、内山先輩のご冥福を衷心よりご祈念申し上げ、北鉄退職者の会を代表して惜別の挨拶にさせていただきます。

追悼の辞

元福島交通労働組合執行委員長 渡邊 國衛

平成二十三年九月二十三日、総評会館で、内山光雄さまの「偲ぶ会」に参加させていただき、黒川元委員長をはじめ多くの先輩の皆様にお会い出来、感慨一入のものがございました。

福島交通労働組合は、内山さんには、本当にお世話になりました。

思い起こせば半世紀近く前になりますが、当時の福島交通労働組合は、私鉄総連の未加盟組合でありました。

昭和四十年の夏の事でありました。

年間臨時給闘争で、福島、いや、東北の怪物と言われた織田大蔵社長と全面対決したものの、「ストが悪い」と、組合の委員長をはじめ、三役全員が懲戒解雇され、臨時給は会社の言いなり。三役の解雇撤回要求をいったん棚に上げ、正に屈辱的な回答を呑んで涙の終結をはからざるを得ませんでした。

その後、大蔵社長は活動家になまで昇格配転や解雇を拡大、団交を拒否するなど横暴を極め、労働組合潰しに躍起になっていきましたが、私たちは解雇撤回、団交再開、権利回復などをめざし、闘争態勢再構築をはかるため、私鉄総連、地元福島県労協への加盟を決意、全面支援をいただくことになりました。



当時、私鉄総連の組織部長だった内山さんが来られ、組合の委員長をはじめ全役員（当時、私は書記長でした）を集め、「織田社長に頭を下げれば明日にも解雇を撤回するよ。これから本気で権利回復、労働条件の向上をめざすなら、苦しくとも、本気で『闘う』決意をするか。あなた方役員の決意次第だ」と言われ、役員お互いが改めて『闘う決意』を固めたのが、福島交通民主化闘争の発火点。いわば、スタート点だったと思います。

その後、統一指導委員会が設置され、総連の力徳副委員長が議長となり、総評、私鉄総連、福島県労協による総がかりの『闘う』体制がつくられていきました。

いよいよ決戦の時を迎え、第一波ストライキを決行したとき、遠隔地の組合員も含め、すべての職場から組合員が福島に集結し、厳しい寒空の下、県教育会館前広場で『総決起集会』が行われました。

この時の内山さんの『内山節』による血を吐くような激励演説が全組合員、家族を痺（しび）れさせ、勇気づけ、闘う決意を再確認させてくれたことが、心に深く焼き付いて思い出されます。

この総決起集会を機に、第二、第三組合に分裂した組合員が多数復帰し、一気に攻勢に転じ、長期ストライキの中で県の仲介もあり、労使正常化への道筋が作られていきました。

私たちは、その後、あの時の闘争を『第一次民主化闘争』と命名しました。二年後、大蔵社長は再び組合破壊攻撃を再開したものの、組合員の鉄の団結と長期抵抗闘争により遂に大蔵社長が退陣、その後、新経営陣との間で解雇撤回をはじめ『普通の』労使関係を取り戻したのが昭和四十三年二月の事でした。

長い道程でしたが、忘れることのできない思い出であり、内山さんには、この間、終始ご

指導をいただいたことは申すまでもありません。

本当にありがとうございます。

現在、福島県は、東日本大震災から原発事故による放射能の被害と、厳しい情勢にあり、全国の皆さんの支援をいただきながら復興への歩みを進めております。

長期の景気低迷、雇用不安の続く中、労働運動の活力を期待するところ大なるものがあります。

往時を偲び、あらためて、心からのご冥福をお祈りして、筆を擱（お）きます。 合掌



道南バス会社更生法下の闘いと組合員読本づくり

私鉄北海道高退協会長 大谷 浩

内山光雄さんは、私の父親（昭和二〇年五月二十九日、千島列島沖で戦死・二六歳）と同じ戦中派世代です。私鉄総連労働学校では、内山光雄さんが講座の中で戦争体験を話されることも多く、私は平和の大切さとともに、父親の戦死を無駄にさせないためにも、「自民党政府による軍備拡大と憲法第九条改悪を阻止しなければならぬ」と、本気で労働運動をやるうという気持ちになりました。

さて、北海道では、道南バスが一九七五（昭和五〇）年九月一〇日に、会社更生法の適用申請（負債総額三八億円）をする事態となりました。道南バスは、資本金三億円、従業員九三四名で、二六五両のバスを所有し、室蘭市を中心に胆振、日高地方など四市二六町村で一八八系統の定期路線バスと観光バスを運行していました。

道内で二番目に大きい民間バス会社が倒産したことの反響は大きいものでした。（札幌地方裁判所は、一九七五（同五〇）年十一月一〇日に道南バスの会社更生法適用と管財人を決定）

私鉄総連は、私鉄北海道労組・道南バス支部を長期闘争支援基準の適用に決め、統一指導委員会を設置して闘争資金の援助やオルグ派遣等、内山光雄中央執行副委員長を先頭に、田村誠、阿部邦松の両中執、木村哲蔵書記が再三来道して、強い指導力と適確な経営分析を行

い、各地域の労働組合や議会議員の支援を得て、会社更生法下の闘争を成功させました。

三年後の一九七八（同五三）年一〇月、私鉄総連は、道南バス労働者の闘いの記録集を作成しています。

この記録集が発行された年、総評副事務局長に就任された内山光雄（五七歳）さんは、「再建闘争と労資の攻防」の表題で、道南バス闘争を約二万三千字の長文で総括されています。

その総括文で、会社更生法下闘争の重点について「管財人は銀行や債権者代表であり、希望退職・人員整理・賃金・臨時給・労働条件の全面的切り下げ、労使慣行の全面改訂などをふくむ合理化案もって労働組合の協力を要求し、これをきき入れない組合には、更生手続きの打ち切り、会社解散」を武器として全面対決を迫ってくるのが常道である。

会社更生法の目的、性格、内容を労働者と組合の立場から組合員によく理解させ、賃金・退職金・雇用などに対する不安感をなくすること。労働者と組合の協力がないと、資本側はなにを失うのか、具体的に明らかにし、弁護団の協力をえてのオルグ活動を強化した。

その結果、減資九〇％による資本の償却、再増資、損害金免除、一般債権の四〇％切り捨て、先任権協定を含む強制解雇はしないという雇用協定の締結等、労働組合の負担と犠牲を最小限に止めて、会社更生を成功裡に進めることができた」と総括しています。

私鉄北海道労組は、一九四九（同二四）年に、道内各企業別組合を産別単一組織として結成し、私鉄総連に加盟しました。さらに、賃金・労働条件の企業間格差解消を目指し、一九六一（同三六）年から「集団交渉方式による産別統一闘争」を闘ってきました。

道南バスの会社更生法下の闘いが成功裡に終結した背景には、「私鉄北海道集団交渉」として、単一組織の団結力があつたと思います。



私が私鉄総連中央執行委員として派遣されて八年目の一九八六（同六一）年、教宣部長に就任しました。当時、内山光雄（六五歳）さんは、労働講座の講師として全国を駆け回り、公労委労働者委員もされ、国労問題での仲裁など多忙な日々を過ごされておりました。内山光雄さんには私鉄総連労働学校の専任講師としてご指導いただき、大変お世話になりました。教宣部長二年目の頃、「新入組合員の学習読本」の改訂再発行を求める声が会議で多く出されました。そこで内山光雄さんに執筆をお願いしましたところ、多忙な日々を過ごされておられるのに、毎月、ワープロで三〇〇〜四〇〇枚ほどの原稿を総連本部に持ってきてくれました。

そのようなことが一年半ほど続き、労働教育センターの南節子社長の協力もあり、一八年ぶりに学習読本「Our Union（私たちの組合）」を一九八九（同六四）年八月に発行することができました。

この「Our Union（私たちの組合）」はその後も、激動する政治、経済、社会に対応するため修正・加筆を行い、二〇一二（平成二四）年九月には第四版を発行しました。（二〇〇八年一〇月以降、紙媒体からデータ提供に変更）

内山光雄さんは、労働者教育に熱き思いを込めて、生涯を全うしました。私も教宣部長の六年間は内山光雄さんのお付き合いが楽しくて、私鉄総連中執として在籍中（一七年間）で、最も充実した時期を過ごせたと回顧しております。

波瀾万丈の生涯を終えられた内山光雄様のご冥福を、お祈りいたします。

職場総点検運動

私鉄高退協会長 井田 隆重

「内山光雄さんは、私鉄の中で、長く長く活躍しました。内山学校の教え子は、私鉄総連の中ばかりではなく、おおくの産別にも生まれ、育っていきました」平成二十三年九月二十三日に、総評会館で行われた内山光雄さんを偲ぶ会での、黒川武さん（元総評議長・私鉄総連執行委員長）の開会挨拶の、はじめの言葉です。

内山さんは、私鉄総連結成（一九四七年一月）から七ヵ月後の第二回大会で中央執行委員に就任、翌四八年、副執行委員長になりました。総連本部が第一回中央労働学校開校を決めたのは、この第二回大会で、十一月には約一ヶ月の長期にわたり、理論学習とともに運動方針づくりから日常実務などの実践的な講座を行いました。内山学校の始まりともいえます。

一九五〇年から五八年まで、内山さんは北陸鉄道労組に戻りますが、東京・品川の総連本部に副執行委員長として復帰した五八年八月大会から、東京暮らしが再開されました。

翌年の五九年十一月から労働講座が再開され、六五年まで年二回の開催でしたが、六六年からは年一回の中央労働講座とし、全国を三ブロックに分けた地方労働講座も始まりました。私もその頃、有馬温泉で行われた中央労働講座で、内山さんの職場活動についての講義を受けたことを思い出します。

春闘での、中央統一交渉から中央集団交渉への変遷は、私鉄の歴史に記録されていますが、



もう一つ忘れてはならないものに、統一労働協約改定闘争があります。

産業別労働組合として、私鉄総連（本部）と経営者団体である私鉄経営者協議会とが、「（主要な労働条件は）中央労働協約で締結する」ことを一九四八年四月に結んでいることは、他の産別には見ることができない画期的な協定です。

この精神をさらに発展させたのが、秋の産業別統一闘争として、二年に一回、全国で取り組まれている統一労働協約改定要求です。

各組合の統一要求として、各種労働協約の統一化に取り組み、これにより、私鉄内の労働条件は、広く標準化されていきました。その典型的なものの一つとして、拘束・八時間、実働・七時間、電車・バスの実ハンドル（運転）時間・五時間三〇分の労働協約締結の闘いは、労働基準法を一步上回るものとして、特徴的です。

こうした労働条件の平準化・標準化は、私鉄総連が永年取り組んできた「職場総点検運動」にそのルーツを求めることができます。

戦後の混乱期を経て、私鉄では自主的な労働条件改善の闘いが広がりますが、内山さんが総連本部に復帰した頃から、職場からの交渉の積み上げがいつそう奨励されました。

北陸鉄道労組の職場交渉や、関東・東武鉄道労組の「明るい職場づくり」（明職運動）運動の経験を、内山さんが労働条件改善運動として全国的に広めたもので、①職場での改善要求を、まず職場長と交渉する。②それでも改善しないものは、一段上の支部段階で、会社職制と話し合う。③それでも改善しない要求に対しては、組合本部が会社と交渉してゆく——という積み上げ方式を提起したものです。

これを、二年に一度の、私鉄総連統一要求と結びつけて労使交渉とする、との進め方は、一・

二の組合の経験を、広く全国的に取り組むように「職場闘争方式」にまで拡げた内山さんの、運動の理論化と実践化の典型といえます。

職場総点検運動は、私鉄内での活動家を生み出し、育て、職場の主人公は労働者そのものであることを実感させるものとなって、現在に至っています。



面白うて やがて身に沁む 内山節

元サービス連合事務局長 高橋 征夫

内山先生（生前どおりに「内山先生」と呼ばせていただきます）の評伝ははじめに人間ありきの終章に、「觀光労連、JTBUの組合は、常に考え、前向きに進む組合で、好きな組合の一つだった」と書かれていることをたいへん誇りに思うが、実情は私鉄総連時代からの内山先生の親身な指導なくして、觀光労連の組織と運動の発展はなかつたろう。私の産別入り（一九七四年）以前から、觀光労連役員は産別の始祖たる北岡孝義氏を筆頭に、先生の信奉者集団と言えし、内山イズムに忠実たらんとした組合の一つであったことは、遅れて加わった私にも十分に実感できた。

内山先生には総評副事務局長退任後すぐに（一九八三年）觀光労連労働学校顧問に就任いただき、一層身近なご指導の恩恵に浴したが、多忙を承知しつつ随分無理なお願いを重ねて、先生の健康に悪影響を及ぼしたのではとの思いが、今も拭い去れない。

内灘闘争に始まる内山先生の偉大な功績は、語るに尽きないが、私はとくに觀光労連の若い活動家や組合員に絶大な影響を与え圧倒的支持を受けた、あの往時の内山節を偲んでみたいと思う。

始まりから笑いの渦がまき起こり、たちまち引き込まれる内山先生の労働講座に、居眠りしている受講生はついぞ見つけたことはなく、その夜の酒席の話題を一人占めにする講師も

他に知らない。笑えるだけの講演は他にもあろうが、事実と経験と運動論にしっかりと裏付けられた内山先生の論法は、大笑いで聞きながらもわが身に引き寄せて考えれば、たちまち身に沁みるのが必定で、まさに「面白うて、やがて身に沁む内山節」なのである。

ある時、キヨスクで数冊の週刊誌やスポーツ新聞を買って求める内山先生の姿に、孫ほども若い組合員の心情をすっかり掴み取る秘訣を思い知らされたが、「アンテナを高く」は活動家のイロハとすれば、先生にはもつと強力で不断に働くリーダーが備わっているらしく思えた。講話や著書に内山先生が残された教訓は数え切れぬが、ここで自分なりに忘れえぬ幾つかを思い浮かべてみる。

「実情に合った運動を」とは、一時の激情に流されて失敗を繰り返した自分には、重く鋭い一撃であったし、空想や冒険の戒めとしてわが胸に大切に仕舞い込んだ。

「団体交渉重視」も先生が力説された大切な信条で、「活動家ノート」「実践論」などは必携の書であった。たとえば、「団交の席には先に着け、後から入場する相手方メンバーの順番で決定権者が分かる」と教わっただけで、新米役員さえたちまち大きな自信を抱けたはずだ。

そして、「常に大衆とともに」「こそ内山イズムの神髄であったと思う。観光労連は運動強化のために、都市ごとに「地区懇談会」を設けて草の根からの組合員交流に力を注いだが、先生はその活動を高く評価され、その分だけわれらの運動に一層力がこもったことを覚えて

いる。

もし、内山先生なおご健在ならば、こんにち、この国の、惨憺たる格差社会の現状、それに立ち向かうべき労働運動にどんな指針を示されたであろうか。そう思うに、今ほど「内山イズム」が求められる時代はない。



内山光雄さん追悼

元連合副事務局長 高橋 均

狂乱インフレの最中の一九七四年一月、私は労働組合の結成に関わった。はじめての春闘が74春闘、あの三万円春闘だ。私の給料は四万円から七万円に上がった。嬉しかった。しかし、それ以上に嬉しかったのが、労働組合を作って「職場で自由にものが言える」ようになったことだった。

内山さんにはじめて教えを乞うたのは、単組を結成して間もない一九七五〜六年、私鉄総連副委員長の頃だと記憶している。「高橋君、君は労働組合を作って自分が変わったと思うだろう」「はい、変わりました」「そうだろう、だから君は人を変えられるんだよ」。禅問答のような会話の中で、ひとり一人が「自由にももの言える職場」を保障することが労働組合にとって一番大事なことなのであり、「君がそう気づいて変わったのだから、きっと人に伝えて変えることができる」と教わった。その時、人の気持ちに寄り添い、いつの間にか人を変ええる不思議な能力を持つ、誇りに満ちた内山さんの魅力に触れたように思う。

内山さんは、「俺は「おつり銭の人生」を生きている」とよく口にされた。天測に通じていたがゆえに特攻機の先導機に乗り込む任務に就き、同世代の多くの仲間を間近に見送り自らは生き残ってしまった、という強烈な体験と自責の念が、そう言わせたに違いない。戦後、労働運動に身を投じて以降、一貫して職場に依拠した原則的な立場に立って運動をリードし、

とりわけ労働者教育に力を注いでこられたのは、教育が人を変える力を持っていた自身の経験から、時代に阿（おもね）ることなく正しいと思ったことを発言し実践する人を育てることが、職場の権利と平和な社会を紡ぎ出す近道だと確信していたからだと思うのだ。

内山さんの人間的迫力と魅力に引かれたのは私一人だけではない。オール青年部ともいえる三〇歳前後の当時の観光労連の役員は、さながら「内山教」の信者のように、総評会館に通ったものだった。「総評に加盟もしていない単産が、総評会館をわがもの顔で歩いている」と、当時は皮肉られていたらしい。

そして、内山さんが総評副事務局長を退任されたのを機に、観光労連労働学校の顧問をお願いした。その譎義はいつも笑いに包まれながらも受講者に物事の本質を深く考えさせる内容だった。こうして、内山学校の門下生は、観光労連においても全国に広がっていったのである。二〇〇〇年一月二一日に開催した内山さんの傘寿を祝うささやかな会は、さながらもう白髪交じりになったかつての教え子たちが集う同窓会となった。

私はその教え子第一期生であることを自認してこれまで運動を続けてきたように思う。「中小単組の出だから、こう見えて結構周りに気を遣いながら運動をやってきたんだよ」と少し自嘲的に言われたことを、自身に共通していたがゆえに鮮明に覚えている。

例えば、自分も中小単組から産別本部へ、そしてナショナルセンター（連合）と同じ道をたどってきた。「人が育って作物が育つ、その人は人によって育てられ、その人はまた人を育てる」という無名の農民詩がある。これから私も、多くの人を育てた内山先生のような道を歩みたいと思っている。

自主管理社会の原点を学ぶ

元総評オルグ 佐々木 啓之

労働組合・労働運動は、働く者一人一人のものでなければならぬ。その自覚と行動をどのように意識づけ、組織し、実行していくか、組織者は職場で、地域で自ら研磨しなければならぬ。

内山光雄氏の実践的教育はこの視点でおこなわれていたと私は理解している。

「幹部闘争から大衆闘争へ」の著書は、自ら組織された実践の指導書として、私にとって今日にいたるまでバイブルである。

私は、昭和三四年、職場（東京交通労働組合）の青年部長になったとき、この本に出会った。当時の組合闘争は、春闘を通じて賃金の引き上げと合理化に対する闘いである。賃金闘争は引き上げ金額を明示するものでありわかりやすい。合理化は、労働者の雇用、既得権を縮小または剥奪するので反対である、という反対闘争であった。

経営者は、賃金の引き上げに度々応じている。合理化は、賃金の引き上げとの対比でコスト削減の妥協として合意する場合が多い。経営者は、常に労働コストは、総合比率で対応するのである。

合理化の対象は労働者の雇用、労働条件、権利、既得権を奪うものである。従って、組合は、合理化に対し雇用、時短、権利、既得権の拡大を同時に要求する。内山氏は、この要求

を労働を通じて具体的に発言し、行動する労働者として組織するために、労働契約意識を労働協約闘争にもとめた。あるところでは、労働協約闘争は弱い戦いとの認識があった。今日の労働運動を省みると内山氏の指導は、まさに、労働者の労働のあり方を自覚させ、幹部請負主義からの脱却、組合は、働くもの、組合員によって守られるという原点を鮮明に示したものであり、さらに、地域生活市民と共同し、産業民主主義、地域民主主義をつくりだすことにあつた。

私は、総評で、最初に労働運動の組織者としての指導を受け、幾多の私鉄争議（特にバス職場の合理化に対抗した組織化）に参加の機会を与えてもらい二二年間総評オルグとしてブライドをもち、今日、仲間とともに、福祉事業にかかわるのも内山さんの指導のお陰と尊敬しております。また、総評時代、機会があり、旧ユーゴスラビアのベオグラードに行き、自主管理社会主義を研究していた「山崎」さんと会う機会があつた。修正社会主義と批判されていた自主管理社会主義の実験を長時間聞かされた。おおいに共鳴し、以降ひそかに自分なりの実践活動に生かしたつもりである。ここに、内山さんの実践論が結びついているといえる。心のなかの自慢である。

私は、明日の労働運動は地域社会と要求を共有し、経済動向、企業動向の枠のなかでの運動から抜け出すことを期待する。



観光労連育ての親、そして上司として

元総評オルグ 北岡 孝義

私の本棚に観光労連（現サービス連合）の機関紙の縮刷版がある。その第二二号（一九六八年九月九日発行）に、「私鉄総連、観光労連支援を決定」という三段見出しの記事がある。観光労連（当時は連絡会議）が結成されて四年目の活動を迎えていたところで、この年の八月、私は専従の事務局長に就任した。

私鉄総連の決定は、「観光労連への加盟促進をはかり、組織的な支援をおこなう」というもので、当時、私鉄総連の組織部長であった内山光雄さんが主導して決めてくれた方針である。観光労連が一〇年間の連絡会議時代を経て、一九七六年二月に名実ともに産業別組合へと脱皮していく過程で、私鉄総連の支援がいかに大きな力となったことか。内山さんを偲びつつ、改めて深い思いにひたっている。

旅行業界における産業別組織の確立をめざして結成された観光労連は、当時の業界状況から、私鉄系旅行会社のもつウエイトは、きわめて大きかったといっている。したがって、私鉄系旅行会社の組織化と産別結集は、単産形成のためには絶対的条件であった。

店の名前は忘れてしまったが、有楽町駅の近くに、大変おいしい地中海料理を食べさせてくれる店があった。内山さんに助けを求めるときに、そこでご馳走になったことは、いまもって忘れられない。『わかった。手を打っておくからな』だが北さん、決して現実を無視し

てはいけないよ”。内山さんは、いつもそう私にアドバイスしてくれた。追いつめられて苦しくなるたびに、そのことをかみしめて、私は生きてきた。内山さんという大先輩の存在がなかったならば、観光労連の委員長を退任したあと、総評全国オルグという労働運動のブロの道を選択したかどうか。いまあらためて、深い感慨を覚える。

内山さんが総評の副事務局長に就任されて、今度は直接の上司として内山さんに仕えることになった。そこでもまた強烈な想い出が残っている。労働組合組織率の低下に危機感をもった総評は、反撃攻勢をめざす方針策定作業（六〇〇万総評建設方針）に取り組んだ。そこで大論争となったのは、企業連による組織化を是とするか否とするかという点であった。内山さんはダメだという。私はそれで組織化するのややむを得ないと主張した。内山さんと真向からぶつかってしまった。『観光労連支援』の方針を主導してくれた内山さんのことを、当時の私は忘れていたのかも知れない。このことを思い出すたび苦々しい思いが、いまま身にひろがる。『北岡君、総評が企業連による組織化を公認していたら、観光労連の形成はできなかつたと思うよ』。会議のあと、私にそうささやいた内山さんの顔はいまでも克明に記憶として残っている。

内山さん、安らかに眠られんことを。



“職場”と“人間”に徹した指導者

連合総研副所長 龍井 葉二

二〇一〇年の九月二三日、内山さんは八九歳の誕生日を迎えた。病室にお祝いの花束をお届けしたのだが、それが最期のお別れになってしまった。

「特攻隊の生き残り」としての想いを背負って戦後の歩みを踏み出した内山さん。

労働組合の先輩たちと一緒に風呂に入った際に、戦前の弾圧や拷問の傷跡を目にして、大きな衝撃を受けたという。

そんな想いが噴出するかのように、北陸鉄道争議と内灘基地反対争（一九五三年）で先頭に立つ。職場闘争、ぐるみ闘争、「幹部闘争から大衆闘争へ」。これらは総評労働運動の屋台骨となり、後の組織綱領草案にも大きな影響を与える。この当時の足跡だけをとっても、「内山光雄」という名は、戦後労働運動の代表的リーダーの一人として歴史に刻まれるべきであろう。

内山さんが何よりも尊重したのは、職場であり人間である。階級解放の重要性を強調しつつも、「人間」として見つめ、「人間」として扱うこと」を訴え続けたところに内山節の真骨頂がある。

高野節が牧師の説教だとするなら、内山節は坊主の説法。戦前以来の仏教社会主義（妹尾義郎ら）の系譜にも連なる。

内山さんは私鉄総連を経て、一九七八年から八一年にかけて総評副事務局長に就任。組織綱領草案の私案を提起したりしたが、あまり相手にされなかったようだ。折しも労働戦線統一問題で大議論が巻き起こったが、内山さんは労働統一への「賛否」を超えた具体的な運動作りが不可欠だと考え、何人かの産別事務局長たちと「総評運動研究会」を発足させる。まだ若い時代に内山さんが立ち上げた「和光塾」の現代版といつていいかも知れない。職場の活動家たちを集め、熱い議論が展開されたのだが、「賛否」の対応が迫られる状況のなかで、次第に先細りになっていった。

この頃の内山さんは、新調のヴァン・ジャケットを着込んで、全国の職場を飛び回っていた。「幹部」のなかでは孤立していたように見えても、「大衆」のなかでは実に生き生きとしていた。車座になったの飲み会では、組合活動のことはもちろん、自慢の釣りやスキートの「講釈」も尽きることがなかった。

やがて、パーキンソン病が内山さんを襲う。入退院を繰り返しながら、最期の数年間は意識が混濁したままのベッド生活を余儀なくされる。お見舞いに伺っても会話はできないのだが、誰よりもどかしかったのは内山さんご本人だったろう。そして何よりも、いまの労働運動の状況を知れば、もつともどかしい想いをされたに違いない。

内山さんの「想い」と「教え」をどう引き継ぎ、受け渡していけるのか？ 遺された者の宿題である。合掌。

〈二〇一〇年十一月記〉

在りし日を偲んで

内山 一枝

早いもので、内山が亡くなってから二年の歳月が経とうとしております。

思い起こせば、私が内山と結婚したのは、六五年前の一九四七年のことであり、内山が二六歳、私が二七歳の時でした。当時、私は北鉄本社 of の会計課で働いており、内山は北鉄労組の書記長で、青年会の活動の中で知り合いました。

結婚式は、内山三兄弟の合同結婚式となりました。私たちの結婚式の準備を進めておりますと、内谷の姉と弟も結婚するという話が飛び込み、それを聞いた内山は、費用が少ななくて済むことから、実家の寺で披露宴をしようと親戚、家族や結婚相手を納得させました。合理的な内山らしいアイデアであったと、今でも懐かしく思い出します。

あの2・1ゼネストの二週間前のことであり、結婚記念写真も新婚旅行もない、慌ただしいスタートでしたが、翌年、内山は私鉄総連副委員長に選出され、私も上京し、世田谷で新生活を始めました。

こうして、労働運動にまい進する内山を傍らから見守る生活が続くのですが、あちこちを飛び回る忙しい日々の中で、時間を見つけては趣味のスキーや釣りを楽しんでおりました。休みの日などに、竿を一本一本とってはなでるように磨く姿を、今でも思い出こします。

体には自信のあったそんな内山が、倒れたのは一九八五年のことでした。六二歳の時です。



福島県で講演する予定だったのですが、右眼に異常を感じたことから急ぎ帰京し、入院しました。病状はみるみる回復し、入院一九日で退院。「あと一日入院していたら保険金がおりのたのに」と後で笑話になったものでした。しかし、これがパーキンソン病の予兆だったので

す。
倒れた後も、意欲的に各地を回りました。しかし、病魔は内山の体を徐々に侵し、一九九〇年、六七歳の時にパーキンソン病と診断されました。その後、言葉がうまく出てこない、足の自由がきかない、など病気は進行し、本人もさぞかし悔しかったと思います。時には弱音を吐くこともありました。

そんな中、いくつかの組合に顔を出しては、元気をもらって帰ってきました。やはり、根っから現場が好きな労働組合運動家だと思っただけです。

約束したことには厳しい人でした。おしゃれな人でもありませんでした。特攻機の乗員として生き残り、生前は、よく「戦後はお釣りの人生を生きている」と言っておりましたが、お釣りの人生どころか、労働運動と巡り合い、波乱の中で十分に生をまっとうしたのではなかったでしょうか。いわゆる「内山学校」の人たちが、全国至るところに散在するのも、それを物語っていると思います。

ありがとうございます。

二〇二二年一月一九日

「内山光雄さんを偲ぶ」編集委員会

東京都千代田区神田駿河台三―二―一

総評退職者の会 気付

電話 〇三(三)三五(一)〇三一一

「内山光雄さんを偲ぶ」編集委員会